

フェミニズム殺人事件

筒井康隆



ハエ入ム殺人事件

筒井康隆



集英社

フェミニズム殺人事件 さつじんじけん

一九八九年一〇月二〇日 第一刷発行

著者 筒井康隆 ついでやすたか

装丁 西口司郎

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

〒一〇五 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

出版部 (〇三) 二三〇一六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 二三〇一六三九三

製作課 (〇三) 二三〇一六〇八〇

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取替え致します。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することとは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

フェミニズム殺人事件——目次

第一章	語り手	7
第二章	ホテルの人たち	11
第三章	滞在客	18
第四章	第一の被害者	62
第五章	警察官	89

第六章	第二の被害者	120
第七章	マスコミ	157
第八章	探偵役	175
第九章	第三の被害者	212
第十章	犯人	241

カバーデザイン

大西憲文

フェミニズム殺人事件

第一章 語り手

石坂は婦人雑誌、ダイレクト・メール、型録^{カタログ}、ショッピング・ガイドの類をいっぱいトランクに詰めこんで、南紀・産浜^{うぶはま}行きの列車に乗った。

そういったもののばかりで一篇の小説を書こうというのはいささか厚かましくも思われるが、これは何も今流行りのカタログ小説に類したものを安易に仕上げようというのではない。実は腹案が九分通りできていて、あとは実際の執筆と、トランクの中の資料を利用して全体にタイポグラフィックな、前衛詩的效果をあたえるための作業を残すだけになっていた。

この暑い夏、なんでまたくそ暑い南紀などへ出かけるのか。まず第一に、石坂にはお目あてのホテルがあった。行くのは六年ぶりだが、待遇がよく、料理が旨く、そして静かなホテルだ。いかに暑かろうが冷房さえあれば都心だろうと南紀だろうと同じである。

第二は、もちろん泳ぐためだ。石坂は海が好きだった。産浜ホテルというその小さなホテルは、常に無人の砂浜に面した崖の上に建っている。

車内は空いていた。僅かな乗客のほとんどが派手な恰好をして泳ぎに行く騒がしい若者たちであり、サンドベージュのブルゾンに麻のパンツというような、白できめたシャイな着こなしは中年の石坂以外に見られない。列車が海岸を走り始めると若者のほとんどは途中の駅でおりてしまい、

車輦内には石坂ただひとりとなって、彼は静かに読書を楽しむことができた。

産浜へ近づくにつれ、腹が減ってきた。産浜ホテルの夕食の旨さを思い、何も食べないことにした。空腹が快感となった。あの落ちついたダイニング・ルームで今夜食べることができる夕食とは、どれほどの旨さのものだろう。また、そのダイニング・ルームで顔をあわせることになる人たちは、どのような紳士、淑女なのだろう。産浜ホテルの魅力とはまた、選り抜かれた滞在客の人の魅力でもあったのだ。

六年前と変わっていないなあ、と石坂は思うのだ。部屋を予約したとき最初に電話口へ出たのは、確かにあの早苗さんだったし、次に替って出たのが早苗さんのご主人でマネージャーの新谷氏だった。ふたりともおれを憶えていてくれたのだ。コック長は今でも加藤さんのままなのだろうか。

六年前、おれのような小説家が、よくまああの格式の高い産浜ホテルに滞在できたものだ。と今でも石坂は思う。ヘビー・スモーカー同士だからというので、ホテルの持主である大実業家の松井会長と、たまたまとある雑誌で対談をし、知り合えたのでなくてもなければ、あのような立派なホテルを紹介してもらえないこともなく、産浜ホテルの存在を知ることになったであろう。

わっ。のどが渇く。これだけはどうも、我慢できない。石坂は躍りあがるように席を立つと車内の売店へ行き、缶ビールを買って戻った。冷え過ぎたビールだ。ビールだけではなくそもそも発泡性の飲みものは体質にあわないのだが、こういう際にはビールしかなく、また、うまいのだからしかたがない。缶の半分を一気に飲んだ。空き腹がたちまち下品な音を立てて鳴りはじめたが、なに、あたりには誰もいない。

あの夏は楽しかったなあ。仕事もはかどった。あのとときの滞在客の誰かと再会できるだろうか。

石坂は少しうとうとした。

ぶるぶる、と身をふるわせて石坂は眼を醒ました。車内の冷房が石坂ひとりの体温を奪い続けた。列車は産浜駅近くのトンネルに入っていた。石坂は車内便所に立った。

プラットホームの熱気が石坂の冷えたからだを包んだ。石坂は風呂に入っているような気がした。終着駅で降りたのは七、八人だった。いずれも身装りのきちんとした人たちであり、別荘にやってきた都会の紳士淑女であろうと石坂には思えた。

産浜駅前はひっそりとしていた。あたりは商店街というほどのものではなく、銀行、郵便局などの他には喫茶店、洋品店、果物屋、花屋、その他数軒の店があるだけだが、さすがに別荘地の店だけあっていずれも高級店らしい威厳を見せ、あきらかに、ただ泳ぎに來ただけといった若者たちを拒否していた。

駅前にはタクシーの営業所があった。セドリックが十台ばかり並んでいた。ほとんどの人が乗ったためたちまち車の数が半分に減った。石坂は綺麗に舗装された駅前広場周辺の眺めをしばらく楽しんでから、いちばん最後に車に乗った。

「産浜ホテル、願います」

「産浜ホテル。へいっ」予想外、といった声で返事をし、漁師のような風貌の運転手が大きく頷いた。

大通りの両側にも、不動産屋のビルや警察の建物などと並んでさらに数軒の高級店が点在していた。イタリア・レストラン。コーヒー専門店。洋菓子店。美容室。蕎麦屋。そして普通の肉屋、薬局、八百屋、和食堂などがあり、次いで左右は住宅街になる。

大通りが右に折れた。左は砂浜であり、陽光にぎらぎらしている太平洋である。そして南国を思

わせる樹樹に囲まれた豪華な別荘。瀟洒な別荘。民宿とかバンガロー風のものは一軒もない。砂浜に
いるのもたいていが別荘人種であり、車でやってきた若者のグループはほんの時おり見かけるだ
けである。列車はトンネルを抜けて産浜に来るが、車だと山腹を大まわりして来なければならな
いのだ。

こんなところに別荘を持つというのはどんな人たちなのかな、と石坂は思う。海の好きな人た
ちなのだろうな。別荘といえば避暑地だが、この暑い暑い南紀・産浜。だからあるいはすでに避暑地
に別荘を持っている資産家の、海の家としての第二の別荘なのかな。そういえばさっきの建物の前
には会社名の下に「海の家」と書かれた看板が立っていたが、あそこも別荘風だった。実業家が自
分の別荘を企業に払い下げたものでもあるのだろうか。

別荘地帯からはすぐに出はずれて、車は崖をのぼりはじめた。崖は太平洋に突き出た岬でもある。
道は細くなり、鬱蒼と繁茂した両側からの木や草の葉が車体を勢いよく擦過して背後に去る。

崖の頂きに二階建ての産浜ホテルが、六年前と同じたたずまいを見せて建っていた。鉄筋コンク
リート造りだが、一階正面玄関附近は荘重な木造の趣きだ。少し離れて見たり浜側から見たりする
ととてもそんな格式の高いホテルとは思えないのだが、入口をまるで個人の邸宅でもあるかのよ
うに装っているために、散策の海水浴客がおいそれと立ち寄れない雰囲気になっていた。

あのとときと同じだ。六年前の記憶が蘇り、石坂はそう思った。正面玄関の前のポーチには支配人
の新谷氏と夫人の早苗さんが並んで立ち、出迎えていくれたのである。

第二章 ホテルの人たち

「ようこそいらっしゃいました」きちんとタキシードを着て長身の新谷氏は、あいかわらずにやかだだった。「お待ち申しあげておりました」

「あれっ。ぼくの到着時間は、知らなかった筈だけど」と、石坂はいった。「ずっと立って待っていてくれたの」

あきらかにジバンシイと考える、シルエットの美しいスーツを着た小柄な早苗さんが、横に立つ新谷氏を見上げ、顔を見あわせて笑った。「一、二分钟前からです。トランクをお持ちしましょう」
「いや。重いから」

「では私が」新谷氏が横から手をのばし、資料がぎっしりのトランクを軽がると持ちあげた。

玄関ホールに入ると思ったほど冷房は効いていず、発汗はおさまりそうになかった。床は檜材で中央に大きなタブリーズのペルシャ絨毯、その他要素所にセネ、ビジャー、イスファハンといった大小のペルシャ絨毯が敷かれている。正面は階段で、踊り場の壁にはボーヴェー近郊の森と小川を描いた大きなコロの絵がかかっている。

「ちっとも変わっていない。あのときのままで」と、石坂は言った。

「それはまあ、当然でございまして」と、新谷氏は笑う。「こういうホテルがごろごろ変わっては

困りますので」

「あら。お汗が」早苗さんは石坂の額を見て言った。「とりあえずお部屋でシャワーをお使いになりますか」

「そうだな」石坂はためらった。「先にダイニング・ルームで、何か冷たいものを飲みたいのだが」
「では、ロビーでご休息ください。ビールでも持たせましょう」

「いいえ。石坂様は、ビールはお飲みになりません」いささか決然として早苗さんは言った。
彼女の記憶力に石坂は一驚した。

「これは失礼を」新谷氏が一礼した。「では冷たいアイス・ティーなどは」

「それだ」石坂は言った。「このアイス・ティーの旨きを思い出した」

客室へ何か運んだらしく銀のトレイを持って若いボーイが階段をおりてきた。石坂がはじめて見る顔だった。新谷氏はボーイに命じてトランクを部屋に運ばせ、自分はホール右手のダイニング・ルームに去った。

「冷房があまり効いておりませんが、お許しください」ホール左手のロビーに石坂を案内しながら早苗さんは言った。「ずっと室内におられるお客様には、これくらいがちょうどおよろしいようなのです」

「ああ。そうだろうね」うわのそらで答えながら石坂は懐かしくロビーを見まわした。十八世紀イギリス風のソファや肘掛椅子による六点セットが三組、各セット間の空間をたっぷりとって散在し、砂浜と海を見渡す奥のガラス窓はほとんど壁一面の大きさである。

天井や壁はチーク材や檜材で渋く莊重にしあげられ、これは産浜ホテルの室内全部に言えることだ。そしてこの部屋にはクールベの絵。エトルタの断崖が描かれて迫力に満ちた大きな画面だ。

石坂が窓に面したソファに掛けると、早苗さんは傍らに立つて言った。「ご健筆はよく存じあげておりますわ」

「ご活躍」ではなく「ご健筆」であるところが石坂には嬉しかった。家に籠ってひたすら書き続けているだけの不健康な日常が、とても活躍などといえたものではなかった。

「ありがとう。あんたたちだつてまったく変わらないうね。加藤さんは元気かい」

「あのかたはもう、相変わらずでございますのよ」そういつて笑うと、早苗さんはロビーの入り口にあるフロントに去った。

客の姿はまだひとりも見かけなかった。眼下の海岸もやはり無人だった。誰かがいればそれはホテルの滞在客にきまつていた。彼方にも断崖が海にせり出していて、その狭い砂浜は崖に囲まれ、ホテルからしか降りていける道はなかった。陽がだいぶ傾いていたが、ロビーに夕陽は射しこんでこない。

「お久しぶりでございますなあ」コック長の加藤が銀のトレイにアイス・ティーを載せてあらわれた。

「やあ。あんたの料理が忘れられなくてね」石坂は加藤コック長の巨大な体軀と突き出した腹部を見るなり破顔した。

「いやいやもう、わたしのことまで憶えていく下さったそうで、まことに光栄でございますなあ」

「なぜもっと早く、もう一度ここへ来なかったのか、自分でも不思議でしかたがないよ。あんなすばらしい経験をしていながらさ」

加藤コック長は真剣になつてしばらく考えた。鼻下髭のある赤ら顔がさらに少し赤らんだ。「そ

れはきつと、なんでございましょうなあ。人間にはこの、楽しもうと思えばいつだって楽しめるものは、いざというときのために先に取っておこうとするところがございませう」

「言えてる」石坂はまた笑った。「ところで今夜の料理はなんだい」

「漁師がいい鱸すずきを持ってまいりました。こいつを焼きますので」加藤コック長は太い眉をうごめかした。「白ワインと赤ワイン、二種類のソースを作るつもりでございませう。お試しください」

話を聞いただけで腹が鳴りはじめた。

「あと、帆立て貝も持ってきております。こいつはぶつ切りにいたしまして、海胆うにをまぶしますので、山葵醬油で召しあがっていただくとこれはもう、最高でございませうな」

「珍味だらうな」石坂は矢も盾もたまらなくなってきた。「矢も盾もたまらん」と、彼は言った。「夕食は何時からだね」

「ははあ。空腹でいらつしゃいますか」コック長は眼を丸くした。「お客さま全員のご希望で七時からということにいたしました、もう少し早めることは可能でございませう」

「いや。それでいいよ。シャワーを浴びて着替えをしていれば、どうせそれくらいにはなる」

「左様で。ではお待ち申しあげております」
加藤コック長が去り、東洋風の香料が匂うアイス・ティーを飲んでいると、マネージャーが部屋の鍵を持ってきた。

「石坂様のお部屋は五号室にさせていただきました。六年前にお入りいただきましたお氣に入りの六号室、例の角部屋は、あいにく小曾根さまご夫妻がお使いでございまして、ふさがっております。申しわけございません」

「あつ。あのご夫婦、来てるのか。そいつは嬉しいなあ」